

[論文]

グローバル化と情報システムの関係性

松本 秀之

要旨

現在あらゆるビジネスにとってグローバル化への対応は最重要課題の一つである。国境を越えた情報網を構築することで誕生した投資銀行は、1980年代以降組織形態を多国籍化すると同時に情報テクノロジーを革新的に利用することで収益機会を向上させた。多国籍投資銀行は国際金融市場の激しい生存競争に勝ち抜く為に、グローバル規模の情報システムの構築に挑戦している。しかしグローバル情報システムを構築する事は、各国の異なる法律、標準、規格から言語、宗教、文化、風習、伝統といった要素まで考慮に入れて行なわなければ成功しない為、困難な作業である事が認識されている。本稿は2002年度に起草し、現在構築した理論検証の段階に入っている「多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究」の重要性を再確認する事を主眼としている。この確認作業の過程で認識されたグローバル化と情報システムの関係性は、今後のグローバル情報システム研究に重要な示唆を与える。

Abstract

Adaptation to the wave of globalization is one of the most important issues for any businesses. Investment banks, which emerged through the construction of the information network to transfer capitals beyond national borders, formed multi-national style and utilized the advanced information technology (IT) after 1980s. Multinational investment banks are taking up the challenges to establish global information systems (IS) to survive in the competitive international financial market. However, it is difficult to activate the global IT/IS beyond national borders because it requires consideration of the differences in law, rule, standard as well as language, religion, culture, manners and tradition of different nations. This paper reconfirms the importance of "Cross-Cultural Comparative Study of Global Strategic IS Management in the Multinational Investment Banks" which was drafted in 2002 and is now validating the emerged theories. The process and result of reconfirmation work in this paper gives a valuable suggestion to other global IS researches in the future.

1 はじめに

あらゆるビジネスがグローバル競争の波に直面している^[6]。その激しい戦いの勝敗を決定付ける要素は何か。国際通貨基金^[11]によれば、

1980年頃から情報技術革命に伴う国際的な貿易と金融の取引量の増加に伴い、グローバル化という言葉が頻繁に使用される様になって来た。ほぼ同時期に投資銀行はグローバル情報ネットワークの構築を行い、経済的収益機会を拡大して来た。組織形態は多国籍化し、その中には国際的巨額金融グループを形成したものもある^[27]。投資銀行の淵源は18世紀後半から19世紀前半ヨーロッパに於いて、国境を越えた資本移動を可能にする情報通信網を活用した、新しい金融ビジネスモデルを構築した事に遡る。グローバル情報システムは、全世界の拠点で情報システムを統合し連結することから

Relationship between Globalization and Information Systems

Hideyuki Matsumoto

University of London, Birkbeck College,
School of Computer Science and Information Systems

[論文] 2005年11月3日受付

© 情報システム学会

生まれる規模の効率性、各地域への適応性、及び各地域間の知識共有という観点から価値を齎すと考えられている。然し乍、経済的メリットの最大化を齎すグローバル情報システムを構築するのは困難で複雑な作業である^[4]。その理由の一つとして、グローバル情報システム構築の過程で各地域の言語、習慣、伝統の違いといった非経済的要素にも取り組まなければならない事が挙げられる^[12]。

本研究「多国籍投資銀行業界におけるグローバル情報システム戦略の比較文化研究」は、2002年に起草した金融業界に於ける情報システム戦略比較文化研究に始まり、研究原案を英国オペレーショナル・リサーチ会議（英語略名；OR46）^[15]に於いて、研究プロセスの骨格とパイロット研究の成果をIFIP8.2 ワーキング・グループ・ミーティング（英語略名；OASIS）^[22]に於いて説明した。その後、グローバル情報システム戦略比較文化モデル（英語名：Cross-Cultural Comparison Model of Global Strategic IS Management；英語略名：CCCM-GSISM）の理論構築及び理論検証を英国情報システム・アカデミー（英語略名；UKAIS）^{[16][23]}に於いて、帰納的理論構築に用いるグラウンデッド・セオリーのコーディング・プロセスの図形化及び分析ツールの定型化を欧州ビジネス・マネジメント・スタディ・リサーチ・メソッド会議（英語略名；ECRM）^[24]に於いて発表した。加えて、CCCM-GSISMと日本の伝統文化との関係性を太平洋アジア情報システム会議（英語略名；PACIS）^[17]に於いて、CCCM-GSISMを統合することで洗い出された情報システム・アウトソーシングの受け入れ先としてのシンガポールの競争優位性をグローバル・アウトソーシング・センター（英語略名；CGO）^{[18][19]}に於いて検証した。更に帰納的理論構築に関わる全過程をICISのスペシャル・インタレスト・グループである情報システム比較文化研究グループ（英語略名；SIGCCRIS）^[25]に於いて、またグローバル情報システム戦略の日本と西洋の根本的な差異をIFIP8.2のワーキング・グループ・ミーティング（英語略名；OASIS）^[20]に於いて検証した。

現在は、グラウンデッド理論によって構築された「スポンサー確定理論」^[21]を民族学的視点から精査している段階である。本稿は、この「多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究」の重要性を再確認することを目的とする。そこで、先ずグローバリゼーションの位置付けを経済的、政治的、文化的側面から明確にする。その後、これらの3つの側面の関係性を議論し、最後に、多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究の重要性を精査する。本稿での確認作業は今後のグローバル情報システム研究の位置付けに重要な示唆を与える。

2 グローバリゼーションの3つの視点

グローバリゼーションは極めて複雑な現象^[7]^[9]で、現在進行中の議論の中で最重要課題の一つである^[7]。このグローバリゼーションに関する議論は、見地（主観・客観）、時間軸（長期・短期）、捉え方（静的・動的）、哲学的立脚点（実証的、批判的、解釈的）の多岐に亘る組み合わせがあるが、多くの研究者のグローバリゼーションに関わる議論は、本研究によって新たに開発された図1の「7つの領域モデル」（英語名：Seven Domains Model；英語略名：SDM）で表現できる様に、経済的、政治的、文化的という3つの視点に分類する事ができる。

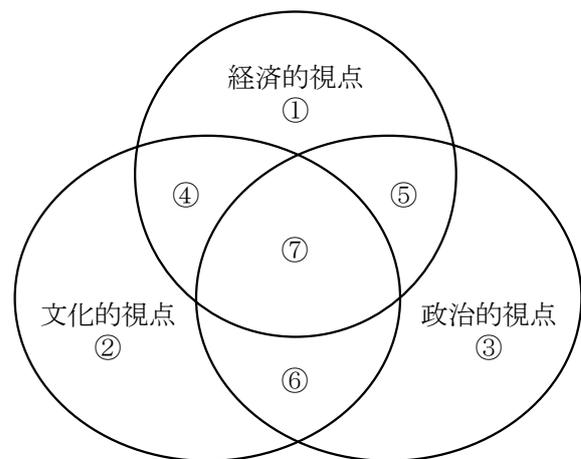


図1：Seven Domains Model(SDM)を用いたグローバリゼーションの視点の分類

2.1 経済的視点

SDMの①に位置するグローバリゼーションの経済的視点からの議論は、「グローバリゼーションの起源」と「グローバリゼーションが齎す経済的格差」に集約できる。グローバルな経済活動は大航海時代の幕開けと共に始まったのであり、現代のグローバリゼーションの淵源は14世紀に遡るとする見方がある。この観点からグローバリゼーションは新しい現象とは言えず^[31]、世界的な産業化プロセスに於ける深遠な歴史的变化であると見る^[7]。2度の世界大戦を経て、多国籍企業が活動する範囲は国境を越え、それに伴って経済は国際化し^[8]、1960年以降、資金調達、信用創造、起業精神などの新しい経済及び金融の概念が台頭した事により国際市場における世界的取引が増加し、更にその速度は1990年代後半の情報技術革命によって加速し、現在、東京、ロンドン及びニューヨークといった主要な金融市場では取引量の増加が続いている^[31]。

グローバリゼーションが齎す経済的格差に関しては、2つの相反する見方が存在する。肯定論の例としては、国際通貨基金^[11]が、グローバリゼーションの加速によって第三世界の国々の生活状態は概ね改善していると指摘している事、Giddens^[11]が、貧困であったとしても開かれた国々は閉ざしている国々よりも経済的不平等は改善されていると指摘している事、また、Venkat^[40]が、短期的には苦痛が伴う変化がある事は否定できないとしながらも、長期的なグローバル規模での強力な経済成長は、技術の進歩と貿易の増加を齎し、結果として貧しい国々の経済発展を齎し貧困を無くすことが可能であると主張している事などがある。

一方で、グローバリゼーションは世界から貧困を無くすことはできないとする否定論も存在する。Williamon^[43]は、20世全般を通して一定の資本に対する収入は全世界の平均として大きく上昇しているにも関わらず、富める国々と貧しい国々との間の所得格差は、この数十年の間に継続的な拡大をしているという事実を挙げ、グローバリゼーションは世界中すべての人々に富を齎す可能性があるものの、国際的な開発を

調整する抑制力が存在しない為に、齎される価値を享受できる人々は常に少数に限られていると指摘している。同様にHerman^[8]は、この数十年間、自由化、効率化、生産性の向上を齎すと考えられていたグローバリゼーションの過程で、国際経済は国際企業のビジネス戦略によって推進されて来た結果、国際経済金融の構造が変化し、1990年代後半のアジア通貨危機で露呈した様に、経済力の弱い国家が資本力の強いヘッジファンドの様な形態の企業に脅かされる状況も起こる可能性があるとして批判している。

2.2 文化的視点

SDMの②に位置するグローバリゼーションの文化的視点からの議論は、「文化が今後どの様に変貌していくのか」という点に集中している。その中には、同質化^{[2][8]}、交雑（ハイブリッド）化^[7]、多文化現象^[35]、西洋文化の非西洋地域への浸透^{[11][28]}、地球規模の米国文化化^[29]など様々な見方が存在する。Akande^[1]、Ramsaran and Price^[31]やSeabrook^[33]は、各地域間のグローバル・レベルのコミュニケーションの増加に伴い、各地域独自の伝統的生活習慣の独自性や多様性が侵害されている事から、グローバリゼーションに対する抵抗が世界各地で起こる結果と成っていると批判している。

Akande^[1]は、この潮流を加速する媒体を西洋文化が国境を越えて流すグローバル情報メディアと多国籍化した企業であると指摘している。これに対しGray^[7]とHalliday^[7]は、独自の文化を意識的に維持する努力の重要性を強調した上で、世界が文化的に同質化あるいは均質化するという考え方は誤りであり、インターネットや衛星テレビの様な高度な情報技術によって遠く離れた地域で活動する人々が相互にコミュニケーションを行なえる様に成る事により、それぞれの特性が混ざり合い文化は交雑（ハイブリッド）化すると説明している。

2.3 政治的視点

SDMの③に位置するグローバリゼーションの政治的視点からの議論は、経済的視点でも議論されている「グローバリゼーションの起源」に加え「グローバリゼーションが齎す人権問題」、「国家主義の復活」や「国家の危機管理」といっ

た分野にまで及ぶ。大航海時代から数世紀に亘って繰り広げられて来た植民地支配の状況に照らし合わせ「支配する側」と「支配される側」という二元論を基軸として、20世紀にすべて消滅した筈の帝国主義的植民地支配は、実際には現在も存在し続けており、グローバリゼーションが加速する過程で新種の帝国主義として支配権を確立しているとする見方がある^[42]。

逆にKaldor^[7]は、グローバリゼーションによって多種多様な国民が異なった立場から様々な要請を国家に対して行える様に成り、世界的に民主主義化が加速したと見ている。ここで問題に成るのは、国家がこの多岐に亘る国民の要請に応える事は極めて困難であり、これに加えて様々な決定はより各国政府間レベルで行われる様に成った為、国民の国政に対する不平不満は全世界的に押並べて増加しており、それを煽る形でグローバリゼーションに反対する国家主義者や原理主義者のネットワークが拡大し、国家に抵抗する新たな地域紛争の火種となっていると捉えている。この脅威に対応する為に国家を超えたレベルでの協力が重要であり、この事からKaldor^[7]は、国際法の強化、人権法、戦争に関わる法律、また市民の要望の新しいトレンドに応える為の国際機関および各国政府に働き掛けられる様な市民団体の強化の必要性を強調している。

3 グローバリゼーションの3つの視点の関係性

グローバリゼーションの議論は経済、政治、文化に焦点を絞ったものだけでなく、これら3つの視点を超えて複数に跨った範囲で議論が行なわれている事でより複雑な論争と成っている。

3.1 経済的視点と文化的視点

SDMの④に位置する経済的視点と文化的視点が交錯する分野は、Benghozi^[2]、Ramsaran and Price^[31]やVenkat^[40]が指摘する様に、文化的意味合いを含む経済的商品が世界的に張り巡らされた流通経路を通して国境を越えて分配される現代の市場メカニズムを背景として、多国籍企業の経済活動が議論の焦点となっている。

大航海時代に東インド会社がアジア地域に於ける貿易を独占し国境を越えて活動を始めた時から、企業は多国籍化することで経済的価値を生み出す可能性があることが認識され始めた。多国籍化企業の定義には「資産を2つないしそれ以上の国において統括するすべての企業」(国連)、「アメリカで売上上位500社以内、6ヶ国以上に海外製造子会社を所有する企業」(ハーバード多国籍企業プロジェクトでの定義)、その他に「多くの国々に生産設備を持っている」、「多くの国々に販売拠点や事務所を持っている」、「共通の経営戦略を持って活動している」、「生産に関してグローバルに考える」、「販売に関して各国のローカル・ニーズに対応する」等の定義が存在する。

Benghozi^[2]は、世界各地には物の生産と分配という経済構造で異なった文化が存在しているにも関わらず、多国籍企業が均質化・標準化された文化的製品をグローバル・レベルで分配する事で、各地域独自の文化が影響を受け消滅していく脅威に晒されている事に警鐘を鳴らしている。同様にVenkat^[40]は、多国籍企業は強力な資本力と情報システムを武器として、生産拠点を低賃金で規制の緩い地域に移動する事で労働生産性の改善を狙い、大量に生産された均質低価格商品を開発途上国の地方市場を含む全世界の市場に大量販売する。それによって多国籍企業は小規模生産業者に対する規模の優位性を勝ち取り、開発途上国の仕事を奪い世界経済の全般を支配すると指摘している。

Akande^[1]は、資本主義経済の論理で活動をする西側諸国の多国籍企業が、情報システムを用いて非西側諸国の地域文化を破壊していると強烈に批判を行っている。また、Tardif^[35]は、文化の根幹部分である言語に焦点を当てて、例えば欧州企業の多くが国境を越えてグローバル市場へ参加する場合、公式企業言語を英語とせざるをえない点にグローバリゼーションの文化的問題があると指摘している。

3.2 経済的視点と政治的視点

SDMの⑤に位置する経済的視点と政治的視点が交錯する分野は、経済的自由競争と人権の不平等との複雑な因果関係^[26]が議論の焦点で

ある。Williamon^[43]は、不必要な政治的規制なしに単純な経済理論に基づいて投資家や企業が自由に行動する事が出来たならば、所謂「見えざる手」が作用することで貧しい国々を含む世界経済全体の繁栄を齎すという立場から、先進国家の保護貿易戦略を取り去る事が出来れば、貧困国々は国際貿易の増加による利益を得る筈であり、人為的・政治的な力学によって経済的不平等が起きていると説明している。

一方でGiddens^[7]は、自由貿易の拡大と不平等の拡大との因果関係は明らかでは無いという立場から、グローバリゼーションそれ自体が不平等を齎すという考え方には反対の立場をとっている。彼は、その不平等の原因は政治腐敗、技術革新の速度差、人口形態の変化および疾病の流行の様な異なる原因に由来すると指摘している。

これに対しGray^[7]は、現在グローバリゼーションを管理、統治、方向付けを行う人物あるいは組織が存在しない事で、産業革命の初期段階に似た無政府状態に陥っているとし、またHalliday^[7]は、グローバリゼーションは本質的に不平等を齎す作用があると指摘した上で、短期的に巨額な利益を生み出す事の出来る金融市場、情報システムあるいは遺伝子工学等の分野を、国家と企業が協力して長期的な見地から管理統治していかなければ、グローバリゼーションは繁栄および安定を齎さないと指摘している。

3.3 文化的視点と政治的視点

SDMの⑥に位置する文化的視点と政治的視点が交錯する分野は、文化のアイデンティティを保護する為にどのような政治的政策を取るべきか、というのが議論の中心である。例えばTardif^[35]は、多くの国々、特に欧州諸国では多文化現象の圧力から国家のアイデンティティを人為的に維持する為に人口比率を管理する新しい政策を見出さなければならないと警告をしている。

3.4 ドライバーとしての情報システム

SDMの⑦に位置する経済、政治、文化の3つの視点が交錯する点では、グローバリゼーションは「世界的な構造改革」、「世界的な産業化プロセス」^[7]、「止める事は出来ない価値創造のプ

ロセス」^[8]、「神秘的現象」^[9]など、多種多様な見地、意見、解釈が存在するが、グローバリゼーションの核と成るドライバーは情報システムであるとする主張に対して反対する研究者は皆無に近い。従ってSDMの⑦の中心には情報システムが存在する。Gray^[7]が指摘する様に、19世紀に構築された大西洋横断電信ケーブルの様な新たな情報技術を利用してグローバリゼーションは強力に推し進められ、20世紀に入ってそれは更に深い次元で進展し、グローバリゼーションの逆行は不可能と成っている。

4 多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究の重要性

ここまで図1の「7つの領域モデル」(英語名: Seven Domains Model; 英語略名: SDM)で表現したすべての分野を説明し、グローバリゼーションに関する議論の全体像を把握した。さてここから、多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究の重要性とは何かという問いに迫る。本章では図2を基に①多国籍投資銀行、②多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略、及び③多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略の比較文化研究という3段階で掘り下げ研究の重要性を説明する。

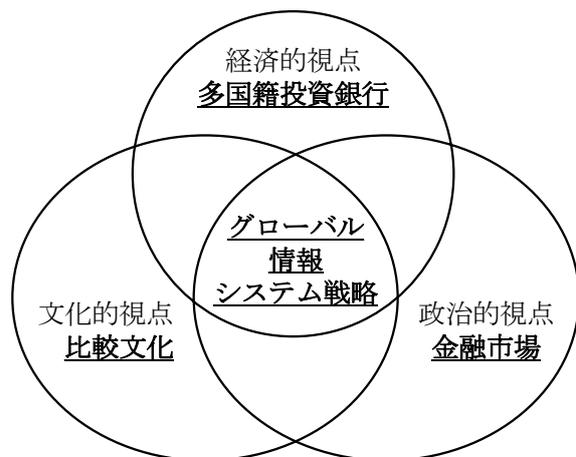


図2: 多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究

4.1 多国籍投資銀行

現代の銀行業は12世紀に、証券業は13世紀にイタリアで出現した。その後、欧州の金融の中心はイタリアからポルトガル、スペイン、フランスへ、17世紀にオランダ・アムステルダムへ、そして19世紀にイギリス・ロンドン・シティへと移動した。米国ではニューヨークのウォールストリートが1830年代半ばに北米最大の証券市場に成長した。この間に18世紀に情報ネットワークを用い国境を越えて資金を移動する投資銀行のビジネスモデルが誕生している。

現代の投資銀行は情報技術の進歩とグローバル化の影響を受けて、1980年代頃に多国籍形態へと変貌を遂げた。投資銀行は有価証券発行体と投資者の間の発行市場での取引を行う。最近では資金調達、募集、引受、吸収合併の斡旋、市場形成、自己勘定売買、資産証券化及び金銭管理等を行うフルサービス投資銀行が出現している。多国籍投資銀行はグローバル化時代に於いて世界中の拠点を情報ネットワークで繋ぎ^[27]、その情報技術を用いて革新的なビジネス・ソリューションを創造することが経済的利益に直結していることから、情報システムへの投資は急激に増加をしている^[10]。

4.2 多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略

一方で多国籍企業にとってグローバルに繋がった有益なグローバル情報システムの構築は大きな経営課題と成って来ている。国境を越えた情報システムを構築する際に企業側は規模の優位性を齎す事の出来る統一規格の情報システムを全世界に導入する事を好むが、それぞれの国々に異なったインフラ、法律、規定、標準、ベンダーが存在する為に、これに適合させながら一つ一つ繋いでいく作業と成る事^[4]、また、言語、宗教、文化、風習、伝統といった非経済的要素も考慮に入れつつ行なわなければ成らない為に、統一規格の情報システム導入は困難な作業と成る^[12]。この意味でグローバル情報システムを構築する為の戦略は多国籍投資銀行にとって重要である。

4.3 多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略の比較文化研究

文化という言葉は、18世紀から19世紀前半にかけて欧州地域内部での異質性及び欧州諸国と植民地との異質性の認識が切っ掛けとなり、文化(Culture)という概念が広く認識される様に成った事によって誕生した。つまり、お互いの差異を感じる事から生まれた言葉が文化という事に成る。有名なKroeberとKluckhohnによる文化の定義付けよれば、文化には①過去、現在、未来へと引き継がれていく伝統としての歴史の意味、②あるグループにおける共有された規則的意味、③適応、問題解決、学習および習慣等の様々な考え方・アイデアとしての心理的意味、④様々な文化の構造的意味、そして⑤文化の淵源を探る起源的意味がある^[3]。「いかなる国家、企業、団体にもそれぞれ何らかの文化が存在する」とは歴史家トインビー^{[37][38]}の有名な言葉である。これに従えばすべての金融市場や投資銀行には、それぞれ独自の文化が存在する事に成る。世界的な金融ネットワークを構築する過程で多国籍化した投資銀行と各国の金融市場の間にはどの様な文化的相互作用が存在するのであろうか。

また前述の通り金融市場の歴史を振り返るとその中心地は時代と共に変遷をしている。19世紀の後半、外国人に土地所有と認められたイギリス・ロンドン、それまで欧州金融の中心地であったオランダ・アムステルダムから、その地位を奪い取り、現在も欧州地域の金融の中心地として栄えている。また、シンガポールの様に金融に焦点を当てて法律を整備し、社会的インフラを構築し、人材を育成する事で、名実共にアジアの金融ハブと成った国家もある^{[14][41]}。この様な金融市場の栄枯盛衰とそこにある文化との相関関係は何なのであろうか。

米系投資銀行は1980年以降グローバル情報システムを革新的に利用し収益機会を向上させて来た。一方で第二次世界大戦後、政府からの手厚い保護を受けて来た日本の金融業界は、財閥系グループ組織の中核的存在として戦後日本の高度経済成長期に重要な役割を担ったものの、金融バブルの崩壊によって1990年代後半

から幾つもの大規模金融機関が倒産する金融危機を経験した^{[30][32][36]}。グローバルに情報システムを構築することは極めて困難な作業である事は既に議論したが、それではこの困難な作業を可能とし収益機会を向上させている米系投資銀行と、一方でこの困難な作業を克服できずに収益機会を逃している日系投資銀行の本質的な文化の差異は何処にあるのであろうか。

これらの問題を精査する事は、多国籍投資銀行に於いてグローバル情報システム構築に携わるビジネス・マネージャー^[5]に対し貴重であり、実際のビジネスの現場での価値^[39]は高い。これに加えてKarahanna, Evaristo and Srite^[13]が指摘している様に、現在の比較文化情報システム研究は、理論構築及び理論検証が不足、研究結果から文化の淵源に関わる分析が充分で無い、研究手法の改善が行われていないという弱点がある。また、Tan and Gallupe^[34]が指摘している様に、現在のグローバル情報システム研究は未開拓の分野であり、単数国研究からの脱却し複数国に跨った研究への飛躍が出来ていない、伝統的な研究手法に捕らわれていない研究が稀少であるという弱点がある。これらの事から複数国に跨ったケースを基に「多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化」の理論構築を行い、それを民族学的手法で検証する研究は、情報システム学のアカデミックの世界^[5]に於いて稀少性が高く価値がある。

5 多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究の重要性

本稿は「7つの領域モデル」(英語名: Seven Domains Model; 英語略名: SDM) を用いて①グローバリゼーションの位置付けを、経済的、政治的、文化的側面から説明し、②これらの3つの側面の関係性を議論し、③最後に多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略比較文化研究の重要性を説明した。その結果、多国籍投資銀行に於けるグローバル情報システム戦略の比較文化研究はグローバリゼーションの議論の中心に位置しているという事、また多国籍投資銀行は経済的視点、金融市場は政治的視

点、また比較文化は文字通り文化的視点の中でそれぞれ重要な要素として位置付けられており、この3つの視点からグローバル情報システム戦略を分析する事は情報システム学の分野に価値がある事が確認できた。2002年度に起草し、2004年度から本格的なデータ収集、分析を開始した本研究は既に構築された理論検証の段階に入っている。本稿での確認作業の過程で認識されたグローバリゼーションと情報システムの関係性は今後のグローバル情報システム研究に重要な示唆を与える。

注

本稿でグローバリゼーションの位置付けの確認作業を行なう際、2000年11月にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで行なわれた「グローバリゼーション: 良いのか悪いのか(和訳)」^[7]での議論を中心に据えた。しかし、これだけでは欧州での議論に偏る懸念が有る為、非西欧地域の見解を織り交ぜて全体のバランスを取る様に心掛けた。

謝辞

本稿を纏めるに当たりアジアでの御自身の研究生活体験に基づきグローバリゼーションと情報システムの観点から御指導下さった、英国ロンドン大学バークベック・カレッジ・コンピューター・サイエンス・アンド・情報システム研究所のデービッド W. ウィルソン博士に感謝の意を表します。

参考文献

- [1] Akande W. (2002), "The Drawbacks of Cultural Globalization", Yellow Times, November 10, 2002.
- [2] Benghozi P.J. (2003), "Economy and Culture : Looking for Public Regulation Issues", Planetagora, July 2003.
- [3] Berry J.W. et al. (2002), "Cross-Cultural Psychology, Research and Applications", Second Edition, Cambridge University Press.

- [4] Earl M. J. and Feeny D. F. (1995) "Information Systems in Global Business: Evidence from European Multinationals", *Information Management: The Organizational Dimension*, M. J. Earl (ed.), Oxford University Press.
- [5] Easterby-Smith M., Thorpe R. and Lowe A. (1991), "Management Research, An Introduction", SAGE Publications, Inc.
- [6] Galliers R.D. et al. (2001), "The myth of the Boundaryless Organization", *Communications of the ACM, SPECIAL ISSUE: Global Applications of Collaborative Technology*, Pages: pp. 74 – pp. 76, ACM Press New York, NY, USA.
- [7] Giddens A. et al (2000), "Globalisation: Good or Bad?" by Anthony Giddens, Fred Halliday, Professor Mary Kaldor and Professor John Gray, LSE Debate, London School of Economics, Global Dimensions, October 11, 2000.
- [8] Herman E.S. (1999), "The Threat of Globalization", Professor Emeritus of Finance, Wharton School, University of Pennsylvania, April 1999.
- [9] Held D. and McGrew (2003), "The Great Globalization Debate: An Introduction", *The Global Transformations Reader*, Polity Press, pp.1 – pp. 50.
- [10] Holland C.P., Westwood J.B. (2001), "Product-market and technology strategies in banking", *Communications of the ACM archive*, Volume 44, Issue 6, pp. 53 – pp. 57, Association for Information Systems Atlanta, GA, USA.
- [11] International Monetary Fund (IMF) (2000), "Globalisation: Threat or Opportunity?" By IMF Staff, April 12, 2000 (Corrected January 2000).
- [12] Johnson P.C., Elmallah A.A., Crow S.R. and Gezi K. (1998), "International Technology Transfer: A Theoretical Development for Firm Level Analysis", *Global Information Technology and Global Electronic Commerce*, AIS, Americas Conference on Information Systems 1998.
- [13] Karahanna E., Evaristo R. and Srite M. (2004), "Methodological Issues in MIS Cross-Cultural Research", *The Handbook of Information Systems Research*, Idea Group Publishing.
- [14] Lee A. (2000), "Singapore: The Lion City in the Asian Economic Crisis", School of Business, The University of Hong Kong, HKU009, June 1st, 2000.
- [15] Matsumoto H. (2004), "Cross-Cultural Comparison of IS Globalisation from the View of IS Strategy and Implementation in Financial Industry", The forty sixth annual conference of the Operational Research Society, Section B, Information Systems, Code: ISS05, OR Newsletter, February 2005, No. 410, pp 25 - pp.26.
- [16] Matsumoto H. (2005a), "Cross-Cultural Comparison Model of Global Strategic IS Management in Investment Banks", *The Conference Proceedings of UKAIS 2005*, PhD & Professional Doctorate Consortium, March 2005, pp.4 - pp.8.
- [17] Matsumoto H. (2005b), "Impact of Japanese Traditional Culture on Global IS Management", *The Conference Proceedings of Pacific Asia Conference on Information Systems (PACIS)*, July 2005, Bangkok, Thailand, pp. 1477 - pp.1484.
- [18] Matsumoto H. (2005c), "Globalization and IT/IS Outsourcing in the Multinational Investment Banking Industry", *The Conference Proceedings of 4th Annual International Outsourcing Conference*, September 2005, Washington, U.S.A., pp.104 - pp.110.
- [19] Matsumoto H. (2005d), "Global Business Process/IS Outsourcing to Singapore in the Multinational Investment Banking

- Industry", *Journal of Information Technology Cases and Applications Research (JITCAR)*, Volume 7, Number 3, Research Article One, pp.4 - pp.24.
- [20] Matsumoto H. (2005e), "Fundamental Difference of Global Strategic IS Management between the Japanese and Western Investment Banks", *The Conference Proceedings of Organizations and Society in Information Systems (OASIS) 2005 Workshop, IFIP8.2, Las Vegas, U.S.A.*
- [21] Matsumoto H. (2006a), "Cross Cultural Research in IS: Finding the Fixed Sponsor Theory", *School of Computer Science and Information Systems, Research Day, London Knowledge Lab of the University of London, London, U.K., January 2006.*
- [22] Matsumoto H. and Wilson D.W. (2004), "Strategic Information Systems Planning for Globalisation in the Financial Industry: Cross-cultural Comparison between a Swiss/American financial institution and a Japanese financial institution in London, Tokyo and Singapore", *The Conference Proceedings of Organizations and Society in Information Systems (OASIS) 2004 Workshop, IFIP8.2 Washington, U.S.A.*
- [23] Matsumoto H. and Wilson D.W. (2005a), "Application and Validation of the Emerged Cross-Cultural Comparison Model with Similar and Conflicting SISP models", *The Conference Proceedings of UKAIS 10th Annual Conference, March 2005, pp. 6.*
- [24] Matsumoto H. and Wilson D.W. (2005b), "Testing a Rigorous Execution of Grounded Theory Using Comparative Cross-cultural Case Studies of Strategic Global IS Management in Investment Banks", *The Conference Proceedings of the 4th European Conference on Research Methodology for Business and Management Studies (ECRM), April 2005, pp.323-pp.336.*
- [25] Matsumoto H. and Wilson D.W. (2005c), "Inductive Theory Building to Visualize Cultural Differences between Japanese and Western Multinational Investment Banks from the Perspective of Global Strategic IS Management", *The Conference Proceedings of the 13th Annual Cross-Cultural Meeting in Information Systems, An official meeting of the AIS Sponsored Special Interest Group SIGCCRIS, December 2005, Las Vegas, U.S.A.*
- [26] Micklethwait J. and Wooldridge A. (2003), "Rebuilding the Politics of Globalization", *New York Times*, April 13, 2003.
- [27] Nanda A., Delong T. and Roy L.V. (2002), "History of Investment Banking", *Harvard Business School*, January 16th, 2002.
- [28] Norchi C. (2000), "The Global Divide, from Davos ...", *Boston Globe*, February 1, 2000.
- [29] Porter K. (2005), "Americanization vs. Globalization, Are these words synonymous?", *Globalization issues.*
- [30] Porter M.E. et al. (2000), "Can Japan Compete?", *Palgrave*, ISBN 0-333-78658-0.
- [31] Ramsaran D. and Price D.V. (2003), "Globalization: A Critical Framework for Understanding Contemporary Social Processes", *Volume 3: Issue 2, Globalization Archives.*
- [32] Schaede U. (1999), "The Japanese Financial System: From Postwar to the New Millennium", *Harvard Business School*, 9-700-049, Rev. May 10, 2001.
- [33] Seabrook J. (2004), "Localizing Cul-

- tures", Korea Herald, January 13, 2004.
- [34] Tan F.B. and Gallupe R.B. (2004), "Global Information Management Research: Current Status and Future Directions", The Handbook of Information Systems Research, Idea Group Publishing.
- [35] Tardif J. (2002), "The Hidden Dimensions of Globalization: What is at Stake Geoculturally", ATTAC, May 29, 2002.
- [36] Thurow L. (2003), "Fortune Favors The Bold, What we must do to build a new and lasting global prosperity", Harper Collins Publishers, Inc, ISBN: 0-06-052365-4.
- [37] Toynbee A.J. (1946), "A study of history, a abridgement of volumes I-VI by D.C. Somervell", Oxford University Press, 1946.
- [38] Toynbee A.J. (1957), "A study of history, a abridgement of volumes VII-X by D.C. Somervell", Oxford University Press, 1957.
- [39] Usunier J.C. (1998), " International & Cross-Cultural Management Research", SAGE Publications, Inc
- [40] Venkat K. (2003), "Thinking Small: Globalization and the Choice of Technology", Orion Online, March, 2003.
- [41] Vietor R.H.K. and Thompson E.J. (2004), "Singapore, Inc.", Harvard Business School, 9-703-040, Rev: August 31st, 2004.
- [42] Widastomo I. (2002), "Globalization: 21st-Century Imperialism", Jakarta Post, November 1, 2002.
- [43] Williamon L. (2002), "Globalization: Good or Bad?", Guardian, October 31, 2002.

著者略歴

1962年生まれ。外資系投資銀行東京支店及びシンガポール支店勤務を経て、現在、日系証券会社ロンドン現地法人テクノロジー部ディレクター。1985年、慶應義塾大学経済学部卒業。1998年、アイルランド国立大学情報経営学修士課程修了。2002年より英国ロンドン大学にて「多国籍投資銀行のグローバル情報システム戦略比較文化」を研究中。昨年、UKAIS・ECRM・PACIS・ICISのSIGCCRISにて研究経過報告を行ない、本年、ECISで研究結果を発表予定。Ph.D. Candidate。